

「月の裏側」

かわらないところは存在すると思いませんか？

(Sorry, This Site is Selected only)

「月の裏側」へようこそ。

おめでとうございます。

あなたは「選ばれた存在」です。

ここに集うことの出来た人間だけが、三島加深について語る権利を持つのですから。

無垢な妄想に賞賛を。

紡がれた言葉たちに祝福を。

残酷な才能の持ち主に、最大の敬意を表して。



愛しているのは、概念上の夏だ。画面の向こうの青い世界。現実には、私たちはこれから処刑場に送られるみたいに生々しい匂いを発し、べたついた汗にまみれて、灼けたアスファルトの上を這いずりまわっている。

彼女のぬめりも、彼女の温度も、私は知りたくなかった。ほしいと思ったのは、さわれない中身だけだった。言葉とかそういうものだった。

「血なんてちつともきれいじゃないわ」

彼女は皮肉っぽく笑って、言った。

「排泄物と同じでしよう？」

綺麗な硝子玉を転がすみたいに、言葉を弄る。

「血液を夕暮れに喩えるのは、臆病なロマンストだけ。卑怯者だけよ。そう思わない？ 光希」

私は黙って頷いた。屋上で、私たちはいつも密かに語らった。愛するみたいに、死ぬみたいに。

「あなたは孤独？」

「いえ。」

「どうして言い切れるの？」

わからないから。それがどんなものなのか。

彼女が哀れみと蔑みの入り混じった目で私を見る。二つの感情は兄弟だ。

「孤独という字を書けない人だって、胸の中に孤独を持っている。説明できないから持っているないだなんて、とてもおかしなことを言うのね」

孤独であるのは、いけないこと？

「孤独は苦い薬のよう。少量なら良薬になるし、過剰に摂取すればその人を殺す毒になる。問題なのは、孤独そのものじやなくて、分量を自分でコントロールできないこと」

「いつか死ぬから、孤独なの？」

そう尋ねた私に、彼女はいつそう同情めいた視線を投げか

けた。

「誰だっけいつかは死ぬものよ。百年もたない身体だもの」
私は私のままで、景色を見ていた。それだけだった。彼女
に出会わなければ、私はただのかたまりでいられたはずだ。

代謝異常を起こしたような季節が終わり、正しい季節に戻
りゆこうとしている。夏はむごたらしく死にかかっていたけ
れど、さりとしてその痕跡を消したわけでもない。べたりとな
すりつけられた血痕のように、まだそこに存在していた。

さらさら、さらさら、頭の中で砂時計の砂の落ちる音がす
る。失われる季節に彼女を残したまま、時が進もうとしてい
るのだ。

私は屋上の柵へと近付き、そこから下を覗いた。遺体発見
現場となった、グラウンドを見下ろす。

私はここで待っている。彼女を殺した人間を。

これは敬虔な弔いじゃない。世界なんて救ってあげない。
私が彼女に向けていたのは、つかめない蛍火を刺すような
愛憎だった。生き埋めになった言葉たちの、瀕死の呼吸に耳
をそばだてるような行為だった。ただただ、人でなしのまっ
すぐさで、彼女を思った。

そのとき、背後でドアが開くきしんだ音がした。

——うつくしいひとを屠った殺人者がやってくる。

私は、ゆっくりと振り向いた。

——『終末時計』

三島加深

◆ 転載・二次使用を禁じます